

金沢大学北溟寮における伝承寮歌をめぐる一考察 —戦後新制大学生精神史研究の試み—

A study on dormitory songs handed down in Hokumei Dormitory of Kanazawa University: On the history of students at the new university system after WW II

石川工業高等専門学校教授（一般教育科・国語） 團 野 光 晴

DANNO, Mitsuharu

はじめに

『北國新聞』2014年12月28日付に、金沢大学北溟（ほくめい）寮が2016年度末で閉寮すると報じられた。金沢大学では寮生は少数派であるが、経済的に恵まれぬ者に大学で学ぶ機会を与え、全国から集まった多彩な顔ぶれに切磋琢磨の場を提供して、多くの人材を世に送り出した北溟寮の意義は、決して小さなものではない。その存在は、金沢大学教育史の重要な一コマとして、何らかの形で後世に伝えられるべきであろう。筆者（團野）は東京都町田市出身、都立町田高校を1986（昭和61）年3月に卒業、同年4月金沢大学文学部文学科に入学し、以後同大学院文学研究科国文学専攻（修士課程）修了の1992（平成4）年3月まで、ちょうど昭和と平成をまたぐ6年間を北溟寮で過ごした。自分で言うのも何であるが、その体験は1980年代の大学生のものとしてはかなりユニークであり、これについての証言は、それ自体で民俗資料的価値を持つものと思われる。しかし、筆者の寮生活の全てをここに記すのは無理であり、またとりとめない回想に終始したところあまり意味はない。そこで本稿では、筆者在寮中に北溟寮で伝承されていた寮歌群を紹介し、元寮生としての立場から、これらについて考察してみたいと思う。寮歌こそ寮生の魂であり、北溟寮の精神を端的に表すものだからである。単なる懐古に終始せず、各種資料も参照して客観化に努め、戦後新制大学生精神史の解明の一助になることを目指したい。尤も、あくまで当事者の考察として、その見聞と認識に限界があることは免れまい。北溟寮全体の一側面に光を当てた試みと受け止めていただき、至らぬ点についてご教示いただければ幸いである。

1. 金沢大学北溟寮概要

金沢大学北溟寮は金沢市弥生1丁目26番5号に所在する男子寮である。石川師範学校弥生寮を引き継ぎ、1951（昭和26）年に丸の内（城内）キャンパス（現・金沢城公園）にあった憬真寮を合併、北溟寮と称する。1949（昭和24）年発足の新制金沢大学では、当初旧制第四高等学校の寮も引き継いでいたが、早くに北溟寮に統合されたようである。1967（昭和42）年、第一期鉄筋コンクリート改築工事完成と同時に北斗（ほくと）寮（男子寮。野田、後に広坂。元金沢高等師範学校五誓〈ごせい〉寮）を吸収合併、翌年二期工事完成、泉学（せんがく）寮（男子寮。野町。元旧制金沢医大寮）・白梅（はくばい）寮（女子寮。泉野町。元石川師範学校寮）とともに金大三寮を構成した。泉学、白梅とともに北溟寮も「自治寮」であり、寮生で構成される寮自治会によって運営されていた¹。

北溟寮は規模が大きく、筆者が在寮した1986年から92年までの時期には、一番多い時で300人程度の寮生が居住していた。圧倒的に工学部生が多く、法・経済学部生がこれに続き、文・理・教育・医学部生は少数派、薬学部生は希少であった。寮生の出身地は北海道から鹿児島まで全国に渡っていたが、中でも関西と中京・東海方面の出身者が多かった。経済的にはやはり貧しい者が多く、ほぼ全員がアルバイトに従事、仕送りのない者や親に仕送りする者もいた。反面アルバイトで得た資金でバイクや中古車を買ったり、スキーや海外貧乏旅行に行ったりするなど活動的な者も多かった。北溟寮生は泉学寮生を軟弱と見なし、自らを硬派・バンカラとして、金沢大学の前身である旧制第四高等学校（四高＝しこう）などの寮歌の歌唱・伝承を中心に体育会的・応援団的の気風を形成、四高生の末裔であることを強く意識する傾向があった。反面「お祭り気分」「笑わせた者勝ち」な雰囲気もあり、極めて個性的な者が多く、寮内にアナーキーな活力が漲っていた。この寮生のエネルギーを集結する大きな行事として、4月の新入生歓迎祭（新歓祭）と11月の寮祭があり、その他7月の七夕ストーム、1月の成人式、2月の卒業生追い出しコンパ（追いコン）などがあった。寮歌はこれら行事の際をはじめ、折々に皆でよく斉唱した。卒業式には寮生が大挙して会場の観光会館（現・金沢歌劇座）に詰めかけ寮歌を歌い、また金沢駅ホームで寮歌を歌って金沢を去る卒業生の乗った列車を見送った。先輩後輩の関係はあるが鉄拳制裁などはなく、相互尊重の精神が行き届いていた。多少羽目を外すことがあっても締めるところは締め、寮規や懲罰委員会など無しに和気藹々とした秩序が自ずと保たれていた。

寮自治会は、寮長・副寮長をトップに会計・厚生・賄いなどの専門業務を行う部局の長で執行部が構成され、居住区ごとのブロック代表が集まる代議員会と、2回生以下で構成される専門部局がその下に置かれる形で組織されていた。執行部は月例の代議員会で活動予定を伝達、代議員はこれをブロック会議で住人に報告し、要望があれば次回代議員会に提出、執行部はこれを検討して業務に反映させた。春と秋に寮生大会が開かれ、半期ごとの活動総括・方針、決算・予算が全寮生で討議され議決された。執行部役員は投票で選出され任期は1年、新歓祭と寮祭についてはそれぞれ実行委員会が組織され、人望と能力のある者が実行委員長に任命された。特に2回生が任命される新歓祭実行委員長は、後々まで当該学年のリーダーと目され慕われた。月300円（筆者2回生の時から700円）の寄宿料は大学経理部に寮生各自が直接収めるが、食費・水光熱費は月4回ほどの「会計業務」で会計部局の寮生が一般寮生から集金し、会計部局から業者に直接支払った。寮食の調理や公共スペース清掃、ボイラー操作など高度に専門的な業務は学校職員または学校当局が契約した業者が受け持った。また寮内に業者が売店を開設し、夕方から夜にかけ食料や日用雑貨を販売した。

石川県下の学生寮自治会で石川県学生寮連合（県寮連）が組織されており、金大三寮と石川県立総合看護専門学校、国立金沢病院付属看護専門学校、鳴和（なるわ）看護専門学校の学生寮が加盟していた。また北溟寮は全日本学生寮自治会連合（全寮連）にも加盟しており、機関誌「緑の旗」（タブロイド判月刊）を通じて東大駒場寮、北大恵迪寮など全国的に有名だった自治寮の情報も得られた。県寮連傘下のサークルとして「山の会（登山サークル）」「卓球サークル（卓サ）」「バドミントンサークル（バドサ）」「昇竜会（中日ドラゴンズ私設応援団）」があった。筆者在寮中に北溟寮は全寮連を脱退、その際県寮連も解散したが、サークルはそのまま存続した。この他特定のアルバイト・チームが存在し、「秋吉軍団（焼き鳥「秋吉」従業員）」「モアイ（焼き芋屋「モアイ」販売員）」「白山兵隊（白山室堂山小屋従業員）」「比咩（ひめ）神社部隊（白山〈しらやま〉比咩神社初詣要員）」などがあった。

2. 北溟寮における伝承寮歌

2015年9月15日に山下友輝・現北溟寮長（理工学域自然システム学類2回生）に電話で問い合わせたところ、現在北溟寮では「金沢大学校歌」「北溟寮寮歌」のみが歌い継がれているとのことだったが、筆者の在寮中には次の6つの寮歌が伝承されていた。

- 1) 金沢大学校歌
- 2) 四高寮歌（大正四年時習寮南寮寮歌「北の都に秋たけて」）
- 3) 南下軍の歌
- 4) 人を戀ふる歌
- 5) 北溟寮寮歌
- 6) 五誓寮逍遙歌

筆者在寮当時、新入寮生は新歓祭の「寮歌紹介」でこれらを番号順に1日2曲ずつ3日間に渡って上回生より紹介され、その後1ヶ月程をかけ2回生を主とする上回生の指導で練習した。歌唱法は原曲のテンポをかなり長く引き伸ばし、全身をのけぞらせ渾身の力で大声を出す応援団風の“パンカラ唱法”とも言うべき北溟寮独特のものであった²。この歌い方では1曲歌いきるのに15分から20分かかかる歌もあり、本気で歌うと息が苦しく、相当体力を消耗する。北溟寮生は春先から4月にかけて、新歓祭前後での寮歌集中練習で声を枯らし腹筋と腰を痛くしてへとへとになるのが恒例であった。いつ、誰がこのような伝承寮歌の選定・構成と歌唱法制定を行ったのかは定かでない。また筆者卒業後、時とともに寮歌の歌い方も変わっていったようで、8年ほど前に筆者より若い世代が中心のOB会に参加した際には、筆者現役の頃に比べ寮歌のテンポが大幅に引き伸ばされていて違和感を覚えた。その頃既に「人を戀ふる歌」「五誓寮逍遙歌」は歌われなくなっていたようで、歌われる寮歌の数も年々減っていったらしい。以下、上記の順に歌詞を紹介する。北溟寮で歌う際の漢字の読み及び歌詞の変更は（ ）で示した³（漢字の読みは現代仮名遣い）。

1) 金沢大学校歌（室生犀星作詞・信時潔作曲、1959〈昭和34〉年）

天（あま）うつなみ けぶらひ 天そそる 白（しら）ねの
北方（ほくほう）のみやこに学府のありて
燦たる燈（ともしび）をかかげたり。
人は人をつくるため のろしをあげ 叡智の時間（とき）を磨く
栄光（はえ）ある人をつくらむと。
新風文化の扉（と）は開かれ あたらしの人 世代にあふれ
手はつながれ 才能（さい）は結ばれ
こぞりてわが学府につどえり。 こぞりてわが学府につどえり。

2) 四高寮歌（駒井重次作詞・岡本新一作曲、1915〈大正4〉年）

- 一、北の都に秋たけて 吾等二十（はたち）の夢数ふ
男女（おのこおみな）の棲む国に 二八（にはち）に帰るすべもなし
- 二、そのすべなきを謎ならで 盃捨てゝ歎かんや
酔へる心の吾れ若し 吾（われ）永久（とこしえ）に緑なる
- 三、そのすべなきを謎ならで 盃投げて呪はんや
歌ふ心の吾れ若し 吾永久に緑なる
- 四、髪は緑の青年が 友情（なさけ）の園に耕（つちか）ひし
いや生き繁（しげれ）る友垣や 三年（みとせ）の春と（を）めぐる哉
- 五、豎琴とりて自治の歌 声高らかに奏づれば

- 三つ (みつ) の城辺 (しろべ) の山彦の 今を限りに呼びかへす
六、自由の為に死するてふ 主義を愛して死するてふ
男の児 (おのこ) の意気地今も尚 石 (いわ) に砕きて砕き得じ
七、藻の花ひらくうつし世に 潮 (うしお) の流れ渦をまく
名もなき道を行く勿れ 吾等が行先 (ゆくて) 星光る
八、氷塊の如 (ごと) 吾 (わが) 胸に 抱く心の解け出で、
語り明かさん今宵かな 星影冴ゆる記念祭

3) 南下軍の歌 (高橋武済作詞・築瀬成一作曲、1907〈明治40〉年)

- 一、啻 (ただ) に血を盛る瓶ならば 五尺 (せき) の男児要なきも
高打つ心臓 (むね) の陣太鼓 霊 (たま) の響 (ひびき) を伝へつ、
不滅の真理戦闘に 進めと鳴るを如何にせん
二、嵐狂へば雪降れば いよ、(いよいよ) 燃えたつ意気の火に
血は逆捲きて溢れきて 陣鼓響きて北海の
「健児髀肉を嘆ぜしが」 遂に南下の時到来
三、花は御室か嵐山 人三春 (さんしゅん) の行楽に
現 (うつつ) もあらで迷 (まど) ふ時 西洛陽の薄霞 (うすがすみ)
霞にまがふ砂煙 (すなけぶり) 蹴立 (けだ) て、進む南下軍
四、平和はいづれ (いづれか) 儉安 (とうあん) の 砂時 (しばし) の夢に憧る、
「痴人始めてよく説かん」 丈夫武夫 (ますらおたけお) は今日の春
花よりもなほ華 (はなや) かに 輝く戦功 (いさお) 立てんかな

4) 人を戀ふる歌 (与謝野鉄幹作詞・作曲不詳、1897〈明治30〉年)

- 一、妻をめとらば才たけて 顔 (見目=みめ) うるはしくなさけある (あり)
友をえらばば書を読んで (みて) 六分 (りくぶ) の俠気 (ぎ) 四分 (しぶ) の熱
二、恋のいのちをたづぬれば 名を惜しむかなをとこ (おのこ) ゆゑ
友のなさけをたづぬれば 義のあるところ火をも踏む
三、あゝわれコレツヂ (ダンテ) の奇才なく バイロン、ハイネの熱なきも
石 (いわ) をいだきて野にうたふ 芭蕉のさびをよるこはず
四、くめやうま酒うたひめに をとめの知らぬ意気地あり
簿記の筆とるわかものに まことのをのこ君を見る

5) 北溟寮寮歌 (端名〈はな〉清作詞・佐々木宣男作曲、1953〈昭和28〉年)

- 一、載雪 (さいせつ) 光る白山の 爽 (さや) けき嶺ぞ希望 (のぞみ) なれ
我等自由の雄叫びは 時の潮 (うしお) に響 (こだま) して
嗚呼情熱の漲 (たぎ) る庭 わが名輝け北溟寮
二、青雲清き城南の 弥生ヶ丘ぞ誇りなれ
風爽々 (そうそう) の学び舎や 世濁 (せだく) を余所 (よそ) に琢磨せば
嗚呼栄光のさす聲 (いらか) わが名輝け北溟寮
三、永久 (とわ) に清浄 (しょうじょう) 犀川の ゆかしき水ぞ伝えなれ

和気晴朗（わきせいろう）の喜びを 尽きせぬ愛に結ぶれば

嗚呼炊煙の揺らぐ園 わが名輝け北溟寮

四、嗚呼北海に風立ちて 濤声（とうせい）夢を揺すぶれば

黒雲凌（しの）ぐ月光を 砂丘に伏して仰ぐ時

わが行く方ぞ映ゆるかな わが名輝け北溟寮

6) 五誓寮逍遙歌（杉山直弘作詞補作・西田重治作曲、制作年不詳、推定戦後初期）

一、遠き雲間に白山（しらやま）の 麗姿を望み犀川の 清き流れに臨みたる

ここ城（じょう）せいの加賀の野に 四年（よとせ）の月日励むなり

二、雲と散りゆく梅花（はな）の下 結びも固き友垣の 行末語る宴（うたげ）かな

春の日やがて暮れ行きて おぼろにかすむ利鎌月（とがまづき）

三、月の川原に降りたてば 淡き愁（うれい）の身に沁みて 空にかかれる天の河

そぞろに寂しく（わびしく）潤む目に 故郷の彼方しのばれる（るる）

四、堅き契りの君と我 清流むすび混濁の 心をすすぎ磨くなり

ああ若き日の四星霜（しせいそう） 思い出豊かに学びなむ

思い出豊かに学びなむ

3. 寮歌の分析と考察

さて寮歌は歌い込むほどに体に馴染み、人を北溟寮生にしていったという実感が筆者にはある。全身を使い大声で歌うことを繰り返すうち、寮歌に結晶した精神が自ずと血肉化し、北溟寮生としての自覚と誇りが生まれ、北溟魂が胸に湧き上がった。ところで上記6つの寮歌の配列（「寮歌紹介」における紹介順）の構成は、四高の歌である「四高寮歌」「南下軍の歌」、及び後述のように「南下軍の歌」を補完する格好の「人を戀ふる歌」を制作年代を遡る形で並べ、これを金沢大学の歌である「金沢大学校歌」と「北溟寮寮歌」で挟み、さらに「五誓寮逍遙歌」で締めくくる形をとっている。寮歌の歌詞とともにこの寮歌の配列順にも、北溟精神の形が現れていると言える。それでは寮歌が示す北溟精神、寮歌によって湧き上がる北溟魂とは何であったのか。一当事者としての回想を交えながら、各種資料も参照しつつ上記6つの寮歌を分析し、これについて考えてみることにする。

3-1 四高の寮歌——「超然」主義と「自由と自治」の精神——

『金沢大学創基150年史』⁴は、旧制高校を特徴づけるキーワードとして「自由と自治」があり、また四高の校風として「社会や世俗から超越して、高潔な精神のもとで生きることを目指す」ことを意味する「超然」も有名であるとする。四高生の末裔を自認した元北溟寮生として納得できる指摘である。この「自由と自治」と「超然」主義という四高精神を北溟寮に伝える歌として、「四高寮歌」と「南下軍の歌」があった。故にこの二つは他の寮歌に比べて圧倒的によく歌われ、特に「四高」の名を冠し明るい曲調で親しみやすかった「四高寮歌」が一番よく歌われた。ただ、四高精神を表現する言葉として特に銘記されたのは「超然」であった。「寮歌紹介」の際に新入寮生は上回生から、「超然」とは世俗を超越して切磋琢磨することであると説明を受けた。寮祭の際に「超然」と大書された看板が玄関の屋根に掲げられるなど、折に触れよく見かける言葉であった。この「超然」主義の象徴が、四高の校章である四稜の北極星であった。これは「超然」の語と併せて寮祭の

看板に掲げられたり、新歓祭のしおりや寮生大会議案書などの印刷物、また寮生Tシャツ・トレーナーなどにあしらわれたりしてよく目にした。夜空に不動の位置を占め人を導く北極星は、「超然」主義の何たるかを無言のうちに語るようであった。

3-1-1「南下軍の歌」と「人を戀ふる歌」——「超然」主義——

この「超然」主義を一番よく表現していると思われたのは「南下軍の歌」であった。「寮歌紹介」の折には、金沢から南下して京都三高、岡山六高、名古屋八高などと対校試合を行う四高運動部選手団を「南下軍」と称し、その応援歌が「南下軍の歌」であり、特に四高柔道部は名門として知られたことがレクチャーされた。「甕に血を盛る瓶」たる俗物とは一線を画して「不滅の真理」である「戦闘」に臨む決意、「嵐狂へば雪降れば」という北陸の厳しい風土に闘志を燃やし満を持して南下を宣言する雄叫び、花見に浮かれる京都を驚かす南下軍の進撃、安寧をむさぼる気持ちを措いて「輝く戦功立てんかな」と敵に挑む気概、これらを歌った「南下軍の歌」からは、「超然」とした四高生の熱い魂を感じた。

実際「南下軍の歌」は、史実としても四高の「超然」主義を歌ったものと言える。『四高八十年』⁵所収の戸松信康「四高物語1」によると、1898（明治31）年から1902年まで在任した四高第5代校長・北条時敬（ときゆき）が、それまで「華美放縦に奔る面」のあった四高の校風刷新に着手した。戸松はこの四高の風紀紊乱の原因として、日清戦争後の「軽佻浮薄の世の風潮」の影響と、「一高を第一志望としたのが、統一試験の結果割り振りによって四高に入学」したため「愛校心に乏しく、落ちついて勉学修養する気分が薄い者」がまま見られたことを挙げているが、これを念頭に『四高八十年』及び『北の都に秋たけて 四高史』⁶の記述を総合すると、北条の教育は、不良学生・教員の追放や生徒禁酒令など綱紀粛正の一方で、校友会結成による部活動振興や「三々塾」創設などの修養奨励により学生の自覚と誇りを育て、四高精神を樹立せんとしたものと言える。戸松は、この「北条校長の指導よろしきを得て、その後校風振興し、向上の一途をたどった」が、そのことを「顕著に表す事例」として1906（明治39）年の「超然火事」と「超然主義」標榜を挙げる。これは四高時習寮が焼けた「超然火事」により寮生活存続の危機に瀕した寮生有志が、寮の再建と生活の立て直しを図って決起団結し、高山樗牛の「吾人はすべからく現代を超越せざるべからず」の理念を反映して「世俗を離れて、寮に立てこもり、自己の進むべき道を求めることに専念することを宣言した」ものである。戸松は「超然主義の標榜 「寒潮」事件と南下軍」の小見出しで「超然」標榜とその翌年の1907（明治40）年の南下軍結成を括り、「超然」の意を明文化した「超然趣意書」（1908（明治41）年）の文面と「南下軍の歌」の歌詞を並べる。戸松によると、この明治40年の南下軍は、河合良成（後の厚生大臣、小松製作所会長）と正力松太郎（後に警視庁警務部長、読売新聞社主）が中心となって結成し、京都で三高・六高との対校試合に臨んだもので、その際作られた「勇壮きわまりない応援歌」が「南下軍の歌」である。四高は野球・庭球・剣道で三高に敗れるが、最後の柔道で正力の活躍により三高・六高を下した。『四高八十年』の「自慢の四高時代」で正力は「金沢に帰ったときは、もう、たいへんな歓迎ぶり、金沢市内はわきにわいた」と回想している。戸松の記述は、上位校である三高に挑んだ南下軍が、北条の教育の一帰結としての「超然」主義を具体化したものであり、その応援歌「南下軍の歌」が、「超然」主義の端的な表現であることを示唆していると言える。

このように考えると、「人を戀ふる歌」を北溟寮の寮歌として歌った意味も見えてくるように思われる。言うまでもなくこれは与謝野鉄幹作詞の一般にも有名な歌である。「寮歌紹介」では男た

る者の生き方を示した歌と説明されたと記憶する。歌詞内容から北溟寮OBの結婚式でよく歌われたが、四高や金大に直接由来する歌ではないため、何故これを北溟寮で寮歌として歌うのが筆者にはよくわからなかった。しかし「南下軍の歌」との関連で言えば、これは硬派として男同士の絆を深め、「超然」主義を補強する意味合いを持つだろう。併せて思い出すのは、これが三高の寮歌だと言われていたことである。正確にはこれは三高の寮歌ではなく、三高の寮歌の中に「人を戀ふる歌」のメロディーで歌われるものがあるということなのだが⁷、これを取って三高の寮歌としたところには、関西人が多かった北溟寮生の、三高に重なる京都大学への敬意が含まれているのではないか。これが、「南下軍の歌」で歌われた三高への敵愾心を緩和する時、「超然」主義は「京大に敬意を払うが、京大には負けない」という、良質の中間層としての自負になっていくように思われる。「超然趣意書」は「混沌タル社会濁流ノ中ニアリテ而モ之ニ感染スルコトナク、尚進ンデ之ガ指導又任ニ当ル」のが「我時習寮ノ取レル所」の「超然主義」であるとしており、また先の戸松「四高物語1」は南下軍を「日露戦争の勝利に酔い痴れている国民に警鐘を打ち鳴らす、注目に値する社会的イベント」としていて、元来「超然」主義が国家エリート養成機関の学生たる四高生の「指導者意識」を含むことがうかがわれるが⁸、これに対し金大北溟寮流の「超然」主義は、権力志向の俗臭も伴う「指導者意識」が希薄な、より個人主義的なものと言えよう。「人を戀ふる歌」が歌った、「奇才」「熱」はないが「さびをよろこばず」、「簿記の筆とるわかものに まことのをのこ君を見る」というのは、この場合まさにこの中流の「意気地」と見えてくる。そのことを反映するかのようになり、「三高何する者ぞ」の気概で南下軍を結成した河合良成と正力松太郎、また明治40年の南下軍の起源となった「超然火事」及び北条校長のことは、北溟寮では伝えられていなかったのである。

3-1-2「四高寮歌」——「自由と自治」の精神——

先述したように、「四高寮歌」は北溟寮で一番愛唱されていた。歌詞内容から感じられたのは、四高の「自由と自治」の精神だった。「自由」とは、1番から3番にかけて「永久に緑」と歌われる夢を追い続ける若さであり、「自治」とは4番で歌われる夢多き若者の友情である。そして後半部の5番以下、声高らかな「自治の歌」、「自由の為に死するてふ」「男の意気地」「名もなき道を行く勿れ」の心意気、記念祭で深められる友情といったモチーフで、「自由と自治」が肉付けされていく。「名もなき道を行く勿れ」に顕著な通り、この後半部のベースにあるのは「超然」主義であり、「四高寮歌」は「南下軍の歌」と相まって、「自由と自治」が「超然」たる者の栄えある特権であることを、私たち北溟寮生に教えてくるのだった。自治とは押しつけられて嫌々やるものではない。それは誇りとともに自ら進んで行なうべきものである。その心得を我が物とした者こそ、「超然」として「自由」な四高生の末裔・北溟寮生であり、そうでない者は「姑息な奴」「娑婆（しゃばい）」と寮内で称した俗物である。このプライドがあったればこそ、寮自治は可能であった。

『四高八十年』の戸松信康「四高物語4」は、この歌の作詞者である駒井重次について「東京出身、高師付属中のころから柔道に天才の誉れ高く、溝淵校長の徳望と四高柔道の威風を慕って四高の門に入り、美男で節度もあり身のこなしも軽やか、「金沢のみならず満天下学生の仰慕のまどで、文武兼備、名声噴々の俊才であった」と記す。この駒井の活躍により、四高柔道部は全国高専柔道大会で1914（大正3）年の第1回大会から3連覇を果たし、駒井卒業後も1920（大正9）年の第7回まで7連覇の偉業を達成した（戸松「四高物語4」及び「5」）。駒井はその後大蔵省を経て衆議院議員、立憲民政党に所属、戦後は愛知大教授・日本税理士会会長を歴任した⁹。その駒井が慕った四高第7代校長・溝淵進馬（しんま）（在任1911〈明治44〉～21〈大正10〉）について戸松「四高

物語2」は、「四高の校長として、その智、仁、勇の全能力を傾注されたといっても過言でなからう。名校長であると共に政治的経綸（ママ）も身につけており、行政手腕を持った人格者」と讃える。また『四高八十年』所収の「四高座談会（一）」（根本松男・中川善之助・長谷川秀治・戸松信康）は、あらゆる学生に対して厳しくも温かい面倒見の良さを発揮し、リベラルな思想の持ち主でもあった溝淵が、「柔道でよく暴れた」駒井を可愛がったことを伝える。卒業生有志によって建立された溝淵の胸像は、今も石川四高記念文化交流館（旧四高校舎）前に建つ。これらをはじめ、『四高八十年』の諸証言は、溝淵の教育が、厳格かつ愛情に充ちた指導を通じ、学生に自発する奔放なエネルギーを一人一人の個性に結実させていくものだったことをうかがわせる。結果四高は、これら個性が自ずと切磋琢磨へと向かう「自由と自治」の精神に貫かれた人間鍛錬の場となり、大正の全盛期を迎えたと言える。スター学生・駒井はこの溝淵の教育の一成果であろう。その背景には、「自由の為に死するてふ」と高吟する大正時代の雰囲気があるが、「明治四十年の「南下軍の遠征」を重大な契機とした、校風建設の基礎工作は」「大正時代に入り、立派に実を結ん」だと戸松「四高物語2」が述べるように、溝淵の教育は、北条校長の教育に端を發し南下軍に至る「超然」主義確立を踏まえ、「自由」を「自治」の水準に高めたものと言える。北条と溝淵は四高精神を確立した二大名校長であると言ってよいが、その意味で史実としても「南下軍の歌」と「四高寮歌」は、相補して「超然」と「自由と自治」という四高精神の神髄を表現する歌なのである。

ただ、北溟寮では「四高寮歌」ゆかりの駒井や溝淵のことは伝えられていなかった。それは「南下軍の歌」の場合と同じく、四高精神をそのまま受け継ぐのではなく、あくまで新制金沢大学の北溟寮生としてこれを消化し我が物とせんとした、北溟精神の発露と見なせるのである。それは、以下に見る戦後に作られた寮歌の存在とも絡んでくる。

3-2 戦後の寮歌——「金沢大学校歌」「北溟寮寮歌」「五誓寮逍遙歌」——

先述のように北溟寮伝承寮歌の配列構成は、中心となる「四高寮歌」「南下軍の歌」「人を戀ふる歌」を、「金沢大学校歌」と「北溟寮寮歌」で挟み「五誓寮逍遙歌」で締めくくる形となっている。前三者が明治・大正期制作の歌であるのに対し、後三者はいずれも昭和戦後期に作られた歌である。この戦後の寮歌を、配列順に検討する。

3-2-1「金沢大学校歌」——室生犀星と「犀川文化圏」——

「金沢大学校歌」は1959（昭和34）年5月の金沢大学開学10周年記念祭で披露すべく、当時の戸田正三学長が室生犀星に作詞を依頼し、犀星の要望で信時潔に作曲を依頼して出来たものである¹⁰。北溟寮の「寮歌紹介」では一番初めに披露される。100人以上の上回生が大音声で斉唱する様に新入寮生の筆者は先ず度肝を抜かれたが、続いてこれが金沢の生んだ名高い文豪・室生犀星の作詞と聞かされ、感銘を受けたのであった。

北溟寮の近くには、犀星が幼少期を過ごした雨宝院や母校の野町小学校があり、「男川」と言われた犀星ゆかりの犀川が悠々と流れ、城内キャンパスへの通学路でもあった犀川大橋や桜橋からは、犀川源流に聳える白山山系の雄大な山々が望まれた。寮生時代の筆者にとって金沢は、これら犀星にちなむ犀川と白山山系の山々という、雄々しく清らかな自然によってイメージされた。これは当時の北溟寮生に共通の感覚だろう。近年“古都金沢”を代表する風景としてよく取り上げられる東茶屋街などの浅野川界限は、北溟寮生にとっては生活圏外でなじみがなかった。また浅野川界限に象徴される金沢の格調高い伝統文化は、ハングリーで実学志向が強く硬派を自認する北溟寮生

にとっては克服すべき“因循”で“軟弱”な部分であり、これに反発するかのように寮内には自然志向が漲っていた。登山やスキー、オフロードバイク、釣りなどに親しむアウトドア派が多く、登山サークル「山の会」が一大勢力をなし、四高旅行部（山岳部）の奈良岳犀滝遭難が伝説化していた。また白山麓に通じる旧鶴來街道や北陸鉄道石川総線が近くを通り、白山室堂や白山比咩神社でアルバイトする者も多いなど、白山を身近に感じる気風があった。このような北溟寮生にとっての“金沢”である犀川南西の寺町台地・加賀平野の市街地を、仮に「犀川文化圏」と呼んでおく。

「犀川文化圏」ゆかりの文豪・犀星が作詞した「金沢大学校歌」は、まさに北溟寮生の“母校の歌”だった。ここで「北方のみやこ」金沢は、雲を突いて聳える白山によって描かれ、「白ね」にかかる雲に、白山山系から流れ出る犀川も連想される。そこに“古都金沢”のイメージはない。「我が学府」はこの自然に囲まれ伝統から自由な地で「燦たる燈を掲げ」「人は人をつくるため のろしをあげ」ている。そこで「つくらむ」としている「栄光ある人」とは、「新風文化の扉」を開く「あたらしの人」である。それは、河合や正力・駒井といった戦前からの“指導者”ではなく、手をつなぎ各々の才能を結び合わせて共に社会を作る民主主義の担い手たる戦後の“市民”であろう。この個性尊重と連帯の精神は、我らが白山と犀川のイメージを介して北溟寮生の心に響き、バンカラでありながら自由で民主的な北溟気質を育んだと言える。「犀川文化圏」こそ「新風文化の扉」を開く我ら「あたらしの人」の土地であるという郷土愛が、北溟流「超然」主義の基盤をなしていたのである。

3-2-2 「北溟寮寮歌」——井上靖のイメージ——

金大中央図書館所蔵の北溟寮誌『北溟』第7号（1960年）所収の藤井安司「北溟寮回顧録」の「(2) 寮歌」に、「昭和廿八年第三回卒業生端名清君（教育二年甲、現在小將町中学校教諭）が懸賞募集の結果一等に当選したもので、歌曲は現教育学部教官佐々木宣男先生の作であつて常に寮生の魂を呼び覚ましてくれている」とあり、第3回（1955〈昭和30〉年）卒業の端名清が1953年に作詞し、佐々木宣男が曲をつけたとわかる。作詞者の故・端名清（はな きよし）氏（1932～2011）は珠州市出身・金沢市在住の水彩画家で、婿養子となって本名は笠間、画家としては端名姓で通した。有島生馬らが結成した洋画家団体「一水会」会員で日展画家、中学・高校・北陸学院短大で教鞭を執り、2005年に一水会常任委員、2008年に石川県文化功労者賞を受賞。エーゲ海を中心とする南欧の風景を心象的に描く絵で知られ、石川県立美術館、石川県七尾美術館などに作品が収蔵されている¹¹。

「北溟寮寮歌」は早くも白山・犀川といった「犀川文化圏」のモチーフを用い、「風爽々」「北海」「月光」「砂丘」と自然を歌い込んで、金沢の“古都”イメージ払拭の意図をうかがわせる。また「我等自由の雄叫びは時の潮に響して」「わが行く方ぞ映ゆるかな」として、「超然」「自由と自治」という四高精神を引き継ぎつつ、「青雲清き」「世濁を余所に琢磨せば」と俗な権力志向は否定する。さらに寮を「琢磨」のみならず「和気晴朗の喜びを尽きせぬ愛に結ぶれば嗚呼炊煙の揺らぐ園」と家庭団欒の場と捉え、戦後を感じさせる。「金沢大学校歌」の「あたらしの人」宣言を先取りした格好で、戦後新制大学創生期の学生気質をよく反映した歌と言えよう。何と言っても北溟寮のオリジナル寮歌であり、「わが名輝け北溟寮」のリフレインと明るい曲調に、北溟寮生としての誇りを大いに鼓舞された。

ところで筆者は今回の調査まで、上記のような「北溟寮寮歌」の沿革を知らなかった。在寮時にも誰がいつ制作したかについては全く伝えられていなかったが、1968年頃に北溟寮が鉄筋建てに

なったことは聞いていたので、そのくらいの時期に作られたのだらうと漠然と思っていた。というのは、この歌が井上靖の作品を下敷きにしたものと思いついていたからで、少なくとも井上は良質の中間小説作家として有名になる昭和30年代以後の作だらうと考えていた。四高OBの井上は、筆者の青少年期にはまだ存命中で（1991年没）、壮大なスケールと清澄なロマンを備えた数多くの作品で幅広く支持され、毎年ノーベル賞候補に挙げられる国民的文学者であった。ちょうど筆者が入寮した1986年に、四高開学百年記念祭開催に併せ井上の詩「流星」（詩集『北国』所収、1958年創元社刊）の詩句を刻んだ文学碑が旧四高校舎（現・石川四高記念文化交流館）前に建立された（『北國新聞』86年10月25日夕刊で再確認）。その「流星」の冒頭は「高等学校の学生のころ、日本海の砂丘の上で、ひとりマントに身を包み、仰向けに横たわって、星の流れるのを見たことがある。十一月の凍った星座から、一条の青光をひらめかし忽焉とかき消えたその星の孤独な所行ほど、強く私の青春の魂をゆり動かしたものはなかった」というもので、砂丘に伏して月を仰ぐ「北溟寮寮歌」4番はまさにこれの本歌取りと思われた。また井上が四高柔道部の猛者だったことは有名で、柔道に明け暮れる四高生のバンカラな青春を描いた自伝的小説『北の海』（1968年12月～69年11月『東京新聞』等連載、1975年中央公論社刊）は、受験勉強中に読んで金大への憧れを募らせた者もいた¹²ほど当時金大三寮でバイブル視されていたが、これにも四高生たちが内灘砂丘で寮歌を歌う場面があった。四高時代の井上「犀川文化圏」内のW坂（桜橋南詰）近くに下宿していたことも、井上と「北溟寮寮歌」のゆかりを強く感じさせた。汚れなき文学者の魂を抱いて長く青春の彷徨にあり、「練習量がすべてを決定する」とひたすら求道的に柔道の猛稽古に打ち込んだ井上を、寮生の做すべき四高バンカラ学生の典型とする意識が、「北溟寮寮歌」を介して寮内に醸成されていたことは否定できまい。

故に、この度の調査で「北溟寮寮歌」が井上の「流星」を収録した詩集『北国』に先行して作られていたことがわかり、大変驚いたのである。制作時期からすると「北溟寮寮歌」の「砂丘」は内灘闘争を強く意識させるものかも知れず、その意味でも戦後的だが、筆者の年代ではこの「砂丘」からは井上靖をまず想起したはずである。そしてこの井上のイメージが、河合や正力・駒井といった代表的四高生の存在を覆い隠し、実際には権力志向の俗臭も伴った四高生を、専ら純情なバンカラ学生として寮生にイメージさせる格好となっていたのである。このことは、次に述べる「五誓寮逍遙歌」の非政治化とも絡みあう。

3-2-3「五誓寮逍遙歌」——北溟寮の集団的無意識——

さて「寮歌紹介」の最後を飾るのが「五誓寮逍遙歌」であった。清らかで雄大な白山と犀川を望む「犀川文化圏」の地で、花見の宴に寮生同士が夢を語り友情を深め、望郷の念を断ち切って雑念を清流ですすぎ、「思い出豊かに学びなん」と誓い合う高潔な歌詞内容は、重く哀愁を帯びた曲調とともに「超然」ここに極まれりの感があり、「寮歌紹介」の締めくくりにかにもふさわしく思われた。6つの寮歌のうち最も歌うのが難しいとされ、追いコンなど特に重要な行事以外にはあまり歌われず、秘曲的に目されていた。北溟寮食堂の食事受け渡し棚の上の壁にその4番の歌詞を記した銅板レリーフが掲げられており、この歌が大切に扱われていることが感じられた。しかし制作年代や「五誓寮」が何ものかは一切伝えられず、謎めいたところのある歌であった。筆者は北溟寮が元石川師範学校の敷地に建っていると聞いていたので、五誓寮とは石川師範の寮であり、その寮歌である「五誓寮逍遙歌」の制作時期も「四高寮歌」と同じ大正時代ぐらいだらうと思っていた。それがこの度インターネットでの調査で「北斗寮」ホームページ¹³を拝見し、五誓寮が金沢高等師

範学校の寮であり、後に金大北斗寮となること、北斗寮では「四高寮歌」「南下軍の歌」を含む13曲の寮歌が歌われており、うち「五誓寮逍遙歌」には第1と第2バージョンがあって、筆者在寮中の北溟寮で歌っていたのは第1バージョンであったことを知った。

「北斗寮」ホームページの「北斗寮々史」によれば、1944（昭和19）年の金沢高師創立に伴い犀川下川除町（現・片町二丁目及び中央通町）に「金沢高師宿舍」が発足、46（昭和21）年9月、金沢高師と共に野田町・元52部隊敷地に移転して五誓寮と命名され、49（昭和24）年の金大発足とともにその所管となった。翌50年、警察予備隊（後の自衛隊）駐屯に伴う高師移転とともにその南の金沢市立野田中学校敷地（後に金大附属高、現・金大附属学校）に移転、52（昭和27）年に高師最後の卒業生を送り出し、翌年に北斗寮と改称した。64（昭和39）年に金大附属高グラウンド整備と新寮建設に伴い広坂に移転、67（昭和42）年、泉学寮に移った一部寮生を除き北溟寮に吸収合併され閉寮した。「北斗寮」の名称は一義的には北斗七星に由来するが、寮の北にある自衛隊と闘（斗）い平和を願う意も込められており、当時は自衛隊に向かって寮の窓から赤旗が突き出されていたという。「北斗寮」ホームページの写真資料の文書によると、「赤星寮」など幾つかの候補から寮生の投票で決定したようである。「北斗寮」OBでホームページ管理人の鈴木利郎氏（1967年理学部化学科卒）によると（2015年9月16日メール）、鈴木氏が在寮当時の北斗寮は50名ほどの小規模寮でまとまりがよく、他の金大寮で「民青」が主流だったのに対し「反代々木」系（同9月20日の電話で「構造改革派」と確認）が主流を占め、寮生の話題の中心はマルクスとサルトルだった。「北斗寮」ホームページでは「五誓寮逍遙歌」を「作詞久保・作曲西田」としているが、鈴木氏によると「五誓寮逍遙歌」の正確な制作年代は判らず、作詞作曲も「久保」「西田」とある以外は不明とのことだった。しかしこれが金沢高師宿舍の五誓寮命名から北斗寮改称までの時期、即ちほぼ占領期に重なる時代の作であることは確実であると思われた。

なお後に金沢大学資料館から、金沢高等師範学校同窓会編『無限』第10号（1986年）所収の本曲楽譜及び歌詞を提供していただいたが、これによると「杉山直弘作詞補作 西田重治作曲」となっており、本稿ではひとまずこちらの説を採った。またここでは楽譜につけられたタイトルは「金沢高師逍遙歌（I）」となっており、歌詞につけられたタイトルは「逍遙歌（その一）」となっているが、「北斗寮」ホームページはこれを「五誓寮逍遙歌（一）」としており、筆者在寮時の北溟寮でも「五誓寮逍遙歌」として伝えていた。さらに金大中央図書館蔵・金沢高師同窓会編『無限』第9号（1983年）所収の辰巳明氏（文科第2部1回卒業生）『金沢高等師範学校小史』には「〔注・1946（昭和21）年〕九月二三日、金沢市野田町の元「山砲隊」兵舎への学校移転によって、学生寮もここに移転し、「五誓寮」を命名されるにいたった。寮生活は、もはや、民主的・自治的に運営されるようになっていた。寮生たちは「逍遙歌」を作詞・作曲して歌い伝え、ストームをやらかして青春のエネルギーを発散していた」とあり、「五誓寮逍遙歌」は五誓寮が発足した1946年に作られたようにも思われる。花見の宴を歌っていることから戦時中の作とは考えにくく、五誓寮発足後それほど時を経ない占領期初期に制作されたものであることは間違いない。因みに本稿で掲げた『無限』第10号所収版の歌詞1番には「城せい」とあるが、「北斗寮」ホームページでは「城西」としてあり、筆者も「城西」と認識していて、これはこの認識でよいだろう。「北溟寮寮歌」で「城南」と歌われた「犀川文化圏」の地は犀川の南西に当たり、金沢城のある小立野台地が犀川の北東に伸びることからすれば「城西」と称するのも妥当と筆者は受け取っていたが、実際には同じ寺町台地でも北溟寮の建つ弥生ではなく、五誓寮が存した野田を指すのだった。

『金沢大学50年史 通史編』¹⁴によると、金沢高師は戦争の激化に伴う旧制中学理数系教員養成

の必要を受けてまず理科のみで創立、1947(昭和22)年より英語と地歴からなる文科が創設された。当初金沢市中村町にあり、その後野田に移転、49年の金大発足とともに金沢大学金沢高等師範学校となり、50年に城内の理学部校舎に移転した。戦後は活発な文化運動を行い、皇国史観を正す「日本古代史博覧会」や小中高校生対象の「生物採集会」、暁鳥敏・湯川秀樹・中野好夫・桑原武夫らを招いた講演会などを実施した。52年に最後の卒業生を送り出して閉校したが、五警察の後身である北斗寮は、53(昭和28)年の内灘闘争に積極的に参加した寮として、『金沢大学50年史 通史編』に金大学生寮中唯一その名を明記されている。また同書によれば、67年の北溟寮への吸収合併に際し学寮運営をめぐる大学当局との折衝で北斗寮は金大四寮中一番激しく抵抗したようだが、OBとして北斗寮の閉寮を見届けた鈴木氏は先のメールで「閉寮の際に学長の書による五警察逍遙歌一番の手拭いが寮生全員に配られ」、「北斗寮閉寮で、在寮生は北溟寮に移動し、それで五警察逍遙歌が北溟寮でも歌われるようになったと思」うと述べていらっしやう。さらに「北斗寮」ホームページ「北斗寮々史」には、60年安保に際しても寮内が騒然となったとある。つまり北斗寮は、サルトルのアンガージュマン(政治参加・社会変革)を実践し、社会問題や大学自治に積極的に関わり大学当局とも信頼関係を築いた、戦後の民主主義を体現する開明的な寮だった。その気風は戦後の金沢高師が展開した文化運動の流れを汲み、戦争遂行目的で設立された金沢高師の戦後における真摯な自己変革の志を受け継いだものだろう。事実、先掲の辰巳論文は、金沢高師を「科学戦士というつわものどもを養成するためにつくられ」としながらも、1950年の警察予備隊駐屯に伴い極めて強引なやり方で移転させられた五警察で「金沢高師寮生十数名と、新しく移ってきた金沢大学の寮生三十数名は、誰いうこともなく、警察予備隊に向かって“平和を守れ”“再軍備を許すな”の文字を窓ガラスにはった。“平和の歌”が合唱されるようになった」こと、また1952年1月に五警察生が成人式に参加して「君が代」を歌うことに反対し、寮生大会で「私達は再びわだつみの声の悲劇をくり返したくはありません」「平和を守るために、真理と自由のために、正しい道を勇氣を持って歩むことをここに声明します」と決議したことを伝える。北斗寮がこの五警察の気風を継承したことは間違いあるまい。

こう見てくると、一見ストイックで内面的にも思われる「五警察逍遙歌」は、実は鋭い社会的意味を秘めた歌だったのではないかと思えてくる。言うまでもなく2番の「雲と散りゆく梅花の下結びも固き友垣の 行末語る宴かな」からは、終戦間もない占領期という制作時期を考慮した場合、国のため花と散ろうと友と誓う軍歌「同期の桜」を想起せずにはいられない。戦死者の分も生きて新たな未来を友とともに切り開くため、この「犀川文化圏」の地で切磋琢磨に励むのだという高潔な自己変革と社会参加の志こそ、「五警察逍遙歌」の精神ではないか。ここで「梅花」の表記は、先掲『無限』第10号所収の楽譜に附されたひらがな表記の歌詞から「はな」と読ませていることが判るのだが、「はな」と言えば平安時代以来「桜」を指すのは常識である。事実、「北斗寮」ホームページでは「はな」を「桜」と表記しており、筆者在寮時の北溟寮でも「はな」と歌い当然「桜」であると認識していた。また「梅香る」とは言っても、宴の席で「雲と散りゆく」のは桜であって梅ではないだろう。「梅花」を「はな」と読ませるのは不自然であって、本来「桜」とすべきところを、戦争に結びつく桜を忌避したか、また桜を生きる希望とすることで戦前の価値観を転倒せんとする意図をあまり露骨にせぬよう、帰還兵や遺族の感情に配慮した結果かとも思われる。

そして、北斗寮閉寮直前に発行された北斗寮誌『北斗』第3号¹⁵掲載の鳴谷潤氏の論文「四高への郷愁を断絶せよ」は、「あの内灘闘争に立ち上った先輩達の、そして安保の全学連の意気はどこに消えたのか。内灘砂丘に囲まれた内部加賀平野は温和な古都である。／しかし外海はシベリヤか

ら吹きつける寒風ですさまじく荒れているぞ。／冬の日本海の厳しさに我々を鍛えようではないか。／（中略）我々は決して大衆であってはならないのである」と記すが、これこそ「五誓寮逍遙歌」の精神を受け継いだ北斗寮精神の真骨頂であろう。それは、四高の「超然」主義も受け継ぎつつ、その指導者意識・権力志向を自己変革・社会参加のエネルギーに転化し、自覚的市民として民主主義を追求する志と言える。

ただ、筆者在寮時の北溟寮では、「五誓寮逍遙歌」からその歌詞と「五誓寮」の名のみが伝わり、五誓寮と金沢高師の沿革は全く伝えられていなかった。そして、五誓寮の後身で北溟寮の直接のルーツである北斗寮は名前すらも伝えられず、結果的に北溟寮の集団的無意識にされていたのである¹⁶。「五誓寮逍遙歌」は純粹に友情と自己研鑽への決意を歌ったものと受け止められ、その歴史と政治性に思いを致す者は筆者在寮時の北溟寮では皆無であった。そこに、筆者の世代のノンポリぶりが鮮やかで、改めて驚かされたのだった。

4. 結論——“バンカラ”純情——

4-1 “バンカラ唱法”の問題

さて先述したように、以上見てきた6つの寮歌は、筆者が在寮した頃（1986～92年）には、原曲のテンポを引き伸ばし全身を使って大音声を開き上げる北溟流“バンカラ唱法”で歌われていた。この歌唱法で歌われることで、はじめてこれらの歌は北溟寮の寮歌となる。例えば、入学式で合唱団が披露する正調の「金沢大学校歌」は、あくまで校歌であって北溟寮の寮歌ではないのである。寮歌練習でも、正しい“バンカラ唱法”の体得を目指して、体をのけぞらせ腹の底から大声を出し、規定の息継ぎ箇所まで声を絞り出し続け、かつ声をなるべく途切れさせぬよう素早く息継ぎする、苦しい訓練が反復された。ところで先の鈴木利郎氏のメールによると、この“バンカラ唱法”は鈴木氏の北斗寮在寮中（1963～67年）には金大の寮には存在せず、寮歌は普通の歌い方で歌われ、「高校で応援団にいた寮生がいたら、寮歌に傾倒したいとの寮生の存在がそのような歌い方になったと思」うとのことであった。しかしこの独特の唱法は、少なくとも筆者が在寮した頃、北溟寮のバンカライメージの中心にあるものだった。なぜこの唱法が発生し定着したのだろうか。考えられるのは、自治寮としての求心力創出の必要ということである。

筆者の青少年期である1970～80年代を振り返ってみると、それはオイルショックによる低成長時代を経てサッチャリズム・レーガノミクス・中曽根民活路線などに至る、福祉国家＝社会民主主義から小さな政府＝新自由主義への世界的移行期であったと言えよう。労使協調路線の成功により「ジャパン・アズ・ナンバーワン」と言われた反面、労働運動は衰退した。また大学紛争以後過激化を強めた学生運動は、浅間山荘事件その他の凄惨な内ゲバを繰り返して恐怖と嫌悪的になり世間から見放され、学生にとって政治は触れてはならないタブーとなった。大学の自治や学問の自由は“政治的中立”の意味になり、知はファッション化した。さらに1979年に共通一次試験が導入され、偏差値に象徴される受験教育の管理化と産業化が進行した。高校は“予備校化”し、行動と連帯によって自ら社会を作る“市民”ではなく、体制への順応度を他者と競い合う“孤独な群衆”を大学に送り出すようになった。さらに85年のプラザ合意による円高不況とその後のバブル景気は、世界市場規模での金融資本主義の威力を見せつけ、経済のみが大事であって政治は不要であり、自ら行動し連帯するよりも現体制にうまく乗って要領よくやる方が賢いという決定的な印象を人々に与えた。高度消費社会化・情報化・国際化による、豊かであることが全ての前提である時代の到

来である。一方で東西ドイツ統一とソ連解体で冷戦が終結し社会主義陣営は崩壊、現実批判のためのオルタナティブが見えなくなって人々の現状肯定・保守化が進んだ。サルトルのアンガージュマンのような政治参加・社会変革の思想は、学生には「怪しい、危ない」と危険視され、「やっても無駄、古い」と冷笑されるようになってしまった。この時代を席卷したのは、動かしようのない“歴史の終焉”としての高度資本主義体制の中で、他者との僅かな差異に自己の自由と存在証明を託す“差異の戯れ”を説くポストモダニズムであった。

当然のことながら学生一般には私生活中心主義が支配的となり、そのことによる学生の組織離れとアトム化が“アパート化”という寮自治の危機に直結するのは自明であった。筆者在寮中、二人部屋の個室だった居室のドアを住人在室中は施錠しないのが不文律だったことは、建物の構造上の制約を超えて大部屋体制を維持し、アパート化を防止する意味合いを持っただろう。しかし当時は“新人類”や“スキゾ・キッズ”、他者と積極的に関わらない若者を描く村上春樹ばかりがもてはやされ、個人の連帯を理論づける思想は皆無であった。この状況下で寮自治を維持するには、新しい連帯、もしくは集団としての求心力を生み出す何かが切実に求められたであろうことは、想像に難くない。それが、伝承寮歌の選定と構成、及び“バンカラ唱法”を生んだのではなかったかと思われるのである。この歌唱法のルーツが寮生の出身高校のバンカラ気質にあるのではないかという先の鈴木氏の指摘は、ひとまず首肯出来る。全体に予備校化の傾向にあった当時の高校であるが、それでも名門とされる高校の中には、文武両道を標榜して部活動が盛んで、バンカラ風の応援が有名な学校が結構存在した。その出身者が“バンカラ唱法”を編み出して寮に定着させたということは、大いにあり得ることである。実際、筆者在寮中の新歓祭実行委員長には、滋賀の膳所高、仙台向山高、盛岡三高などバンカラで有名な名門校や、高校ラグビー部出身者が就任していた。また寮生には高校時代にハードな運動部に所属していた者が多く、肉体的苦行である“バンカラ唱法”をファイトとチャレンジ精神で積極的に受け入れる素地があったと言える。

4-2 “四高神話”としての寮歌、祝祭としての自治

先述のように、北斗寮最後の寮生・嶋谷潤氏は、「四高への郷愁を断絶せよ」「我々は決して大衆であってはならないのである」と呼びかけていた。筆者世代の北溟寮生はこれに対し、伝承寮歌の選定・構成と“バンカラ唱法”で応答したと言える。まず「四高寮歌」「南下軍の歌」「人を戀ふる歌」で四高の「超然」主義と「自由と自治」の精神を継承しつつ、これを「金沢大学校歌」と「北溟寮寮歌」「五誓寮逍遙歌」で挟み「犀川文化圏」に土着させ戦後化した結果、当時の国民的文学者・井上靖が四高生の典型に収まるようになった。河合良成や正力松太郎、駒井重次といった四高の寮歌ゆかりで後に世の指導者となる代表的四高生は、純真一途に柔道に打ち込んだ井上のイメージに取って代われ、国家エリート養成機関であった四高は、汚れなき「超然」主義と「自由と自治」の精神の下、青春のエネルギーを純粋に燃焼させる場として神話化されたのだった。寮歌を歌うことは、この“四高神話”を生きて大衆から「超然」とした「自由」な“四高生の末裔”になることであり、その選ばれし者に許された特権たる「自治」に積極的に参加し自己向上を目指す良質な自覚的中间層市民への志向こそ、北溟精神であった。そして、“バンカラ唱法”によって“四高神話”を一層深く生き、その感動を肉体的苦痛と共に分かち合い、寮生としての鉄の団結を確認する喜びが、北溟魂に他ならない。これは運動部出身者の多かった北溟寮生を大いに魅了した。

神話を生きるという意味で、寮歌を歌うことはまさに祝祭である。そして寮歌によって担保される寮の祝祭性は、そのまま寮自治の機能を果たすものであった。「寮歌紹介」を中心とする新歓祭

は北溟寮生になるための通過儀礼であり、雪の降り積もった日に寮内放送1つでたちまち大勢の寮生が集まって一斉にスコップを手に取り寮の前の道のみをみるみる除雪していくというのも一種の祭である。思えば、日々の地道な業務一つ一つ、さらに生活の一コマ一コマが、寮自治という祭の構成要素であり、その頂点に位置するのが11月の寮祭であった。自治会役員を務めた者や、人望があり尊敬を集める者などの北溟寮の“神々”が、寮生手作りの神輿に乗せられて皆に担ぎ上げられ、寮祭バンドのボーカルとしてシャウトする様に、皆が熱狂した。この“祝祭”が井上靖に象徴される体育会的・応援団の気風を基調としていたことは、学生の政治参加が忌避された時代において、寮を非政治化する役割を果たしたと言える。因みに四高のバンカラ学生としては井上よりも蓬髪の学生服姿の中野重治の方が実態に近いかも知れないが、四高出身の文学者として井上と並び著名であるプロレタリア作家・中野のことは、寮生の意識にはあまり上らないのであった。

4-3 祝祭の終焉

その意味で、北溟寮の閉寮は“祝祭の終焉”ということになるのだろう。先述の山下寮長からの聞き取りでは、2015年9月の段階で北溟寮生は67名ということで、筆者在寮時のほぼ5分の1という激減ぶりに愕然とした。これでは閉寮もやむを得まいが、なぜこのような事態に立ち至ったかを考えてみると、ほろ苦い思いを禁じ得なかった。先の嶋谷論文はまた「歴史の発展からみると大学の自治、寮の自治は守られなければならない」と明記していたが、既に“政治”から疎外されていた筆者の世代は、このように未来における寮自治の必然性を確信する歴史観を明確に持ってはいなかった。何と言ってもバブルの当時、“歴史”は“終焉”し、未来なき豊かな現在が永続すると考えられていた。しかしそれでもなお“豊かな時代”に乗れなかった者の居場所として、寄宿料月300円（後に700円）のオンボロ自治寮という“時代遅れ”の北溟寮が存在し、300人からの寮生を抱えていたのである。とにかく北溟寮は維持されなければならない。そこで、寮自治に歴史的確信を持たない寮生を自治体制に集結させるため自ずと編み出されたのが、寮歌を中心とする自治の祝祭化だったのである。これにより北溟寮生は、超歴史的に“四高生の末裔”となり、経済的境遇から強いられたものでも、単に国から保護を受ける者の義務でもない、「超然」たる者の「自由」の行使として、自分たちの寮自治に誇りを持つことが出来たのである¹⁷。「俺たちはただの貧乏人ではない！」と、後輩と言い合ったことを思い出す。豊かな時代の風潮に抗して、私たちはよく奮闘したと言うべきだ。役職に欠員を出すこともなく、決して楽ではない寮運営を無償でこなし、皆で助け合う自治を通じて友情を育み、切磋琢磨したのだから。

しかし私たちの自治は、青春のエネルギーの純粋な燃焼としての祝祭的限界を超えられなかった。自治寮としての北溟寮の未来を構想し、自ら歴史を切り開く力は、当時の私たちにはなかったのである。寮祭のさなか、その混沌たる盛り上がりについて「何なんだこれは？」と問いかけた寮生に対し、「ポストモダンでしょ！」と応じた寮生がいたという逸話¹⁸は、象徴的であろう。「超然」主義と「自由と自治」の精神を掲げた私たちも、やはり80年代後半のバブルの子供だったのである。北溟寮の終焉とは、いわばこの“バンカラ純情”の一帰結である。なんとそれは井上靖の詩「流星」の、忽焉と消えていく流れ星に似ていることか。しかし、そうやって終わってしまえば、私たちの自治を、私たちがなりの民主主義を、信じていなかったことになる。SEALDsの出現や18歳選挙権など、時代が確かに変わり行く中、北溟魂が不滅の北極星として再び新たな輝きを放つ日を期して、筆を置きたい。

注

1. 以上、『金沢大学50年史 通史編』（金沢大学50年史編纂委員会、2001年）及び「北斗寮」ホームページ（<http://homepage3.nifty.com/wakwaku123/hokutoryou/hokuto.html> 2015年8月31日アクセス）によった。
2. 白梅寮OGで筆者の2年先輩・高木美保氏（教育学部卒）によると、白梅寮では「四高寮歌」のみを普通に歌っており、泉学寮では「四高寮歌」「南下軍の歌」を大声で通常よりやや遅いテンポで歌っていたが、北溟ほどテンポは遅くないとのことであった（2015年9月22日聞き取り）。
3. 歌詞の表記は以下に拠った。「金沢大学校歌」は「金沢大学校歌」ホームページ（http://alumni.nst.kanazawa-u.ac.jp/Kogyo/NewFiles/body_koukasong.html 2015年9月7日アクセス）。「四高寮歌」「南下軍の歌」は『寮歌集』（四高同窓会、1961年）。「人を戀ふる歌」は『日本近代文学大系 第53巻 近代詩集I』（角川書店、1972年）。「北溟寮寮歌」は1番のみ北溟寮福祉部発行『北溟』第6号（1959年）及び第7号（60年）に掲載されているのでそれに拠り、以下は團野の記憶と2年先輩の土田良平氏（工学部卒）の助言（2015年12月20日）に拠る。「五誓寮逍遙歌」は「北斗寮」ホームページ（注1に同じ）を参照しつつ、金沢高等師範学校同窓会編『無限』第10号（1986年）所収版に拠った。なお、便宜上筆者の方で番数番号を振った。「人を戀ふる歌」の原詞は16番までであるが、北溟寮では3番と4番を入れ替え4番まで歌っており、その通りに記載。「金沢大学校歌」及び「人を戀ふる歌」は作者の著作権消滅のため使用可とJASRAC北陸支社より回答を得、「金沢大学校歌」は金沢大学総務部総務課にも使用許可を得た。「四高寮歌」「南下軍の歌」は石川四高記念文化交流館より使用許可を得、金沢大学資料館にも使用について申し入れた。「北溟寮寮歌」は2015年9月現在の北溟寮長・山下友輝氏及び作詞者の故・端名清氏夫人笠間怜江氏より、「五誓寮逍遙歌」は「北斗寮」ホームページ管理人で北斗寮OBの鈴木利郎氏（1967年理学部化学科卒）及び作詞者の故・杉山直弘氏令嬢杉山京氏、作曲者の故・西田重治氏ご長男西田邦浩氏より使用許可を得た。上記関係各位に感謝申し上げる。
4. 金沢大学創基150年史編纂部会編、北國新聞社、2012年。
5. 四高開学八十年記念出版委員会編、四高同窓会発行、1967年。
6. 作道好男・江藤武人編、財界評論新社、1972年。
7. 『日本近代文学大系 第53巻 近代詩集I』（注3）を参照した。
8. 金沢大学資料館企画展示「破かれた恋愛小説 『寒潮』に翻弄された四高生」（2015年12月9日～2016年2月10日）でも、「超然」に含まれる指導者意識について指摘があった（2015年12月25日確認）。
9. 『新潮日本人名辞典』新潮社、1991年。
10. 『金沢大学50年史 通史編』（注1）に拠った。
11. 端名清氏の経歴は石川県立美術館ホームページ（http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/index_j.html）、一水会ホームページ（<http://www.issuikai.org/member/iin/2307-bio.html>）、石川県七尾美術館ホームページ（<http://nanao-art-museum.jp/>）、を参照（上記いずれも2015年10月5日アクセス）。更に『北國新聞』1996年3月6日「作家の仕事場」、夫人の笠間怜江氏の証言（2015年10月7日聞き取り、注3に同じ）を参照した。
12. 高木美保氏の体験談。注2に同じ。

13. 注1に同じ。
14. 注1に同じ。
15. 1967年4月30日発行、鈴木利郎氏蔵。嶋谷論文は鈴木氏よりメール添付写真で提供を受けた。
16. 2015年9月22日に土田良平氏（注3参照）に問い合わせたところ、土田氏は北斗寮の名前だけは聞いていたそうで、若干の例外はあるようである。しかし土田氏も北斗寮がいかなる寮であるかは全く知らなかったとのことであった。
17. “神話世界を生きる祝祭”としての寮自治の把握は、拙稿「消費社会と人間—大江健三郎『万延元年のフットボール』論—」（『日本近代文学』第90集、2014年）における、民衆暴動発生のメカニズム分析から着想した。
18. 筆者の1年先輩の小池広人氏（経済学部院修了）から聞いていた話を、2015年12月20日に改めて小池氏に事実確認したものである。